研究エッセイ ESSAY

神奈川大学みなとみらいキャンパス開設予定地関連

「騒動」顛末の記

中林広一（非文字資料研究センター研究員）

筆者は研究の専門分野を中国の歴史、それも農業を中心とした社会・経済の歴史に求めるものであるが、その研究スタイルはオーソドックスな歴史研究に属するものである。すなわち、研究の主たる素材として据えるものは文字情報であり、農業にまつわる文字史料を地道に追っていくことが活動の中心となってくる。

従って、非文字資料とはそこまで縁は無い。日本の場合であれば、争論の際に用いられた各種絵図や四季耕作図のような農業の様子を描いた屏風絵といった絵画史料も豊富にあるが、中国においてはそうした史料の数が限られていることもあり、そこには自ずと限界が生じる。

ただ、史料として直接は活用しないまでも地形図を始めとした各種地図には目が行きがちになる。例えば、明治初期に陸軍が作成した迅速測図は彩色の美しさに惹きつけられるだけではなく、地形と土地利用の関係性を考える際に多くの示唆を与える内容を含んでいるし、海外での測量を経て作成された外邦図は中国各地の地理的なイメージを獲得するのに欠かすことができない。

このように筆者の地図に対する関心は強いものがあるが、これは何も研究に直結するものだけに限らない。普段何気なく見かける地図にも興味深い内容が含まれるケースは間々あるし、つい先日もそうした非文字資料をきっかけとしてごく私的な「騒動」へと発展する機会があったので、そのあらましを紹介したい。

さて、周知の通り本学は2021年にみなとみらい21地区に新たなキャンパスを開設する。みなとみらいキャンパスの設置について発表が行われたのが昨年の4月中旬、この頃は教職員・学生を問わず人に会えば必ずこの話題が出るようなニュースであった。筆者が所属する外国語学部国際文化交流学科の共同研究室にて事務のパートをされているTさんとも当然新キャンパスの話題で盛り上がるが、この新キャンパスの開設予定地である43街区がかつてどのような土地であったかをめぐって筆者との間で意見が分かれる。Tさん曰く「1980年代あの場所は海であった」と。「いやいや、あの地は海際にあたり、あくまで陸地、海ということはない」とは筆者の抗弁。

お互い古い記憶を頼りにした主張なので、それ以上の決め手はなく、その場では消化不良のまま会話を終える。そして、そんな会話をした記憶も薄れつつあったある日、キャンパス予定地のそばを散歩していると、目の前に公的機関が設けたと思しき案内板が（図1）。どのような内容かと近づいてみると、それが図らずもみなとみらい21地区の埋立ての歴史に関する内容であった。ご丁寧に埋立て時期に応じた色分けを施した地図まで添えてあり、何たる奇遇とばかりに地図に目を通してみると、43街区は赤・青・黄の三色で塗りつぶされていた（図2）。案内板の注記によると、赤は関東大震災復興期（1923年～1945年）の、青は再開発時代（1983年～）の埋立てであることを示しているらしい。そして、黄色の部分については特に注記も無いので埋立て時期が特定できない場所なのではないかと推測される。

図1　埋立てにまつわる案内板（筆者撮影）

それはともかく、1980年代に43街区が陸地かはたまた海の底かといった対立はこれをもって解決を見た。3分の2程度が海、

図2　43街区における埋立ての変遷（筆者撮影）

残りが陸地ということになり、筆者とＴさん共に部分的な正解という痛み分けの結果に終わる。

…と、ここで話は大団円を迎えるわけではない。よくよく考えると、これから新キャンパスを設置せんとする用地に埋立時期の不確かな部分が含まれているという事実は、いささか気になるところでもある。幸い案内板のある場所から徒歩 10 分そこらで横浜市立中央図書館があるので、みなとみらいの散歩はそのまま新キャンパス用地に関する調査へと移行していった。誰に頼まれたというわけでもないのに、ここらへん研究者としての性とでも言うべきか、悪癖と称すべきか。

この間色々と足を運んで調査を進めたが、その過程については省くとして、以下埋立ての経過について確認できた点を、順を追って説明していこう。43 街区の一部を占める黄色の箇所、その上部にオレンジ色で塗られた土地があるが、案内板の注記では開港時代（1859 年～1889 年）の埋立てとされている。この場所は工部省鉄道寮が 1871（明治 4）年に実施した埋立事業に由来する地であり（山本弘文「横浜野毛浦海岸埋立一件」（『神奈川県史研究』22、1973 年）、p.46）、1882（明治 15）年の測量になる迅速測図では直角にしつらえられた特徴的な岸壁の様子が見て取れる（図 3）。

図 3　「第一軍管地方二分の一迅速測図」部分

ところが、1906（明治 39）年測図の地形図ではこの直角を描く岸壁が消失している（図 4）。要は上述した案内板の地図で言うところの黄色に塗られた部分が埋め立てられているということである。この埋立ての時期を明示する史料は得られていないが、1893 年（明治 26）に倉田太一郎が発行した「新撰横浜全図」では直角の岸壁が残されているから（図 5）、1893 年から 1906 年にかけての時期に埋立てがなされたと見てよい。

その後、作業場の増設を目的とした埋立て（上記地図、赤色部分）が三菱重工業によって行われ（上記地図では 1945 年までの埋立てとされるが、実際は 1953 年の竣工。横浜市港湾局臨海開発部編『横浜の埋立』（横浜市港湾局臨海開発部、1992 年）、p.258 参照）、1987 年にみなとみらい 21 地区を作り上げるべく青色部分の埋立てがなされて現在に至る。

図 4　旧陸軍作成２万分１地形図「横浜」部分

図 5　「新撰横浜全図」部分　横浜開港資料館所蔵

このように 43 街区の成り立ちが明確になってきて、心のモヤモヤも晴れたかと問われれば否と言わざるを得ない。すなわち、43 街区は明治と昭和の 2 回にわたって埋立てが進められた土地であり、当然双方の埋立ては工法や土壌の質、何から何まで異なっていると考えられる。そうした土地の上に地上 100m にもなんなんとするビルの膨大な質量がのしかかる、大規模な地震が発生した時にはどうなるのか。筆者は地盤工学に関する知識を全く持ち合わせていないし、専門家に言わせればこうした状況は何ら心配に値しないのかもしれない。しかし、素人の感覚からすると、埋立て時期の異なる場所が入り混じった土地であるという事実は不安感を煽る内容として十分に過ぎる。

こう考えると色々と慌ただしくなってくる。当時筆者は神奈川大学教職員組合の副委員長を務めていたから、まずはと執行委員長と書記長に話を持ちこんでみる。地図を見せつつ 43 街区の埋立てと地盤をめぐって状況を説明して、組合としての対応を相談する。書記長のＩさんは職務上全学に顔が広かったこともあって、工学部の先生に意見をうかがってもらったし、また全学向けの新キャンパス説明会でも本件について質問してもらった。

そうした経緯もあって、差し当たり法人側からは地盤調査をきちんと行う旨、言質がとれたので、とりあえずは一段落といったところではあるが、正直なところ共同研究室での談笑からこうも話が展開していくとは想像だにしなかった。これもある意味、非文字資料の持つ力あってのことだろうし、案内板という身近な存在であってもかくも大きなインパクトを呈しえたことは、非文字資料研究が単に学術の世界にとどまるだけのものではない有用性を兼ね備えていることの証左であるようにも思える。ともあれ、今後みなとみらいキャンパスが災害に強い環境を作り上げられるとしたならば、私たちはキャンパス開設に尽力した各関係者に加えて、あのぽつねんと佇む案内板と共同研究室のＴさんにも感謝の念を抱かねばならないのではないかと愚考している。